

令和 2 年 6 月 29 日現在

機関番号：32102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13153

研究課題名(和文)日本のバスケットボール競技におけるバリーシステムに関する史的研究

研究課題名(英文)A historical study on the Bally system in basketball of Japan

研究代表者

小谷 究 (Kotani, Kiwamu)

流通経済大学・スポーツ健康科学部・准教授

研究者番号：90434159

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：早稲田大学がアメリカ太平洋沿岸で遠征を実施した1927年から1928年には、すでに中西部にあるアイオワ大学においてバスケットボール競技のオフェンス戦術であるバリーシステムが採用されていたが、この時期の太平洋沿岸ではバリーシステムが認知されていなかったことから、バリーシステムは1933年に Jack Gardnerによって日本に紹介されたことが明らかになった。さらに、バリーシステムはアウトサイドスクリーンの組み合わせによって構成され、ガードナーによる紹介以前にハイポストでのアウトサイドスクリーンを採用していた日本ではバリーシステムが広く採用されたことも明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

バスケットボール競技の技術・戦術の視点から取り組まれた大川の一連の研究はアメリカにおける技術・戦術について分析したものである。しかしながら、これらの研究では、日本の技術・戦術については扱っていない。一方、小谷による一連の研究は日本の戦術の変容過程に関する研究であり、アメリカの技術・戦術との関わりについては部分的な素描に終わっているといわねばならない。このように、これまでの技術・戦術史研究は日本とアメリカの技術・戦術についてそれぞれ個別に行われてきた。本研究結果はアメリカと日本の戦術の関係性について明らかにしたことから、これまで個別に行われてきた研究の間を繋ぐことができたといえる。

研究成果の概要(英文)：When Waseda University toured the United States from 1927 to 1928, the Barry System developed by Sam Barry had already been adopted at the University of Iowa in the Midwest. However, as the American tour of Waseda University was centered in the Pacific Northwest where the Barry System was not known during this period, it is unlikely that Waseda University was responsible for bringing the Barry System back to Japan from their American tour. On the other hand, as Jack Gardner and Clarence Anderson had played the Barry System under Barry, it is possible that Gardner introduced the Barry System to Japan during his visit in 1933. In the Barry System, players are positioned at the high-post and on both wings, and the ball is passed to any of these three players while the passer and receiver perform an outside screen. The outside screen that is a core element of the Barry System was already in use in Japan at the time, and the Barry System introduced by Gardner became widely adopted.

研究分野：スポーツ史

キーワード：バスケットボール 歴史 戦術 体育 スポーツ アメリカ 日本

1. 研究開始当初の背景

研究の学術的背景

ボールゲームにおける戦術は、競技力を支配する特別な要因となっており、バスケットボール競技においても戦術が重要な役割を果たす。近代日本のスポーツ技術の歩みをまとめた『スポーツの技術史』に収録されている「バスケットボールの技術史」において著者の牧山(1972)は、日本のバスケットボール競技史における代表的な戦術のひとつとしてバリーシステムをあげており、現代の戦術においても、バリーシステムに分類されるものがあるとしている。このように、バリーシステムは、現代のバスケットボール競技において使用される戦術の原初形態のひとつであり、日本におけるバスケットボール競技の戦術史上、重要な戦術であるといえる。本研究は、日本のバスケットボール競技における戦術史上重要とされるバリーシステムの導入に関する史実を明らかにすることで、今日のバリーシステムに分類される戦術に対して鋭い感覚を持ち、今日の戦術がどのようなものなのか、戦術についての特定の考え方、当然視している、あるいは依存しているものは何かといったことを考える機会を得ようとするものである。

さて、バリーシステムの日本への導入やその実際については今のところ判然としない。日本バスケットボール協会の記念誌(1981)に集録されている座談会において東京帝国大学OBの田中秀次郎と京都帝国大学OBの松井聰は、早稲田大学が1927(昭和2)年から1928(昭和3)年にかけて行ったアメリカ遠征からバリーシステムを日本に持ち帰り、導入したと回顧している。しかし、日本のバスケットボール競技について史的に研究した筈田(2003)によれば、1933(昭和8)年にアメリカ・南カリフォルニア大学のキャプテンを務めたJack Gardnerが来日し、そこでバリーシステムを紹介したという。しかし、筈田の研究ではJack Gardnerが日本にバリーシステムを紹介したことに触れているのみで、その導入について詳細な分析が行われているとは言い難い。このように、日本のバスケットボール競技史においてバリーシステムの日本への導入は早稲田大学によるものと、Jack Gardnerによるものとの2つの説が存在している状態であり、日本におけるバリーシステムの導入に関する研究が待たれるところである。また、バリーシステムについては、及川(2009)が戦術史の視点から研究に取り組んでいる。この研究は昭和初期の日本におけるバスケットボール競技の競技力向上過程について分析したもので、1930年代の日本においてバリーシステムの定着を阻害した要因として、日本人プレーヤーのドリブル技術水準が低かったことがあったと示唆している。しかしながら、当時のバリーシステムの動きを史実として確定した史料は雑誌に掲載された1つの史料のみであり、史料批判が厳密になされているとは言い難い。申請者は、バリーシステムの動きに関する史料を複数有しており、さらに今後の史料蒐集で発掘される史料をもとに史実を確定していくことで、当時のバリーシステムの動きが明確になるものとみられる。

このように、バリーシステムは日本におけるバスケットボール競技の戦術史上、重要な戦術であるものの、日本への導入やその実際は明らかにされていない。

2. 研究の目的

本研究では、バスケットボール競技のオフェンス戦術であるバリーシステムを日本に紹介した人物と時期を確定させたいと、バリーシステムの実態を紐解き、バリーシステムが日本において広く採用された要因を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

対象期間に発行されたバスケットボール競技の刊行物を基本史料として収集した。収集した史料は、そのものが偽造であったり、他の史料を模造、借用したものではないかを確認する外的批判を行い、続いて史料と史料、史料と先行研究とをつき合わせる内的批判を実施し、各史料の史実を確定した。その後、史料批判までの過程を経て確定された個々の史実を用いて過去の出来事とその要因を時間軸に沿って因果的に説明した。

4. 研究成果

バリーシステムを考案したSam Barryは1922(大正11)年よりアイオワ大学のコーチを務めており、バリーシステムは1925(大正14)年までにアイオワ大学男子バスケットボールチームによって採用された。したがって、早稲田大学がアメリカ遠征を実施した1927(昭和2)年から1928(昭和3)年には、すでに中西部にあるアイオワ大学においてバリーシステムが採用されていたが、早稲田大学のアメリカ遠征は太平洋岸において行われており、この時期の太平洋岸ではバリーシステムが認知されていなかったことから、早稲田大学がアメリカ遠征からバリーシステムを持ち帰り、日本に導入したとは考えにくい。一方、Jack GardnerとClarence Andersonは、1929(昭和4)年に南カリフォルニア大学のコーチとなったSam Barryのもとでバリーシステムをプレーした。このことからバリーシステムの日本への紹介は1933(昭和8)年来日したJack Gardnerによるものといえよう。

Sam Barryが考案したバリーシステムは、ハイポストと両ウィングにプレーヤーを配置し、この3名のプレーヤーのいずれかにボールを入れて、パッサーとレシーバーによるアウトサイドスクリーンを行うものであった。また、ウィングのプレーヤーにパスが出された場合には、パッサーとウィングのプレーヤーによるアウトサイドスクリーンの動きの後に、ウィングのプレー

ヤーからハイポスのプレーヤーにパスを出し、ウィングとハイポスのプレーヤーによるアウトサイドスクリーンが行われた。つまり、バリーシステムはアウトサイドスクリーンを連続して行う、オンボールスクリーンを組み合わせる構成するオフェンス戦術であった。

1933（昭和8）年に Jack Gardner と Clarence Anderson が来日し、講習会のなかでバリーシステムを紹介した。Jack Gardner は、ポールマンとハイポストもしくはウィングのプレーヤーによるアウトサイドスクリーンと、それに続くウィングとハイポスのプレーヤーによるアウトサイドスクリーンというオンボールスクリーンの組み合わせをバリーシステムの基準となる動きとして紹介し、さらに、ディフェンスの対応に合わせて動きを変化させるオプションをいくつか紹介した。

バリーシステムを構成する要素のひとつであるアウトサイドスクリーンが既に採用されていた日本において、Jack Gardner が紹介したバリーシステムは広く採用された。日本では、Jack Gardner がバリーシステムの基準として紹介した動きが用いられ、ディフェンスの対応に合わせて動きを変化させるオプションは行われていなかった。しかし、Jack Gardner によるバリーシステムの紹介は、それまでハイポストでのアウトサイドスクリーンといった単体のオンボールスクリーンでオフェンス戦術を構成していた日本に、オンボールスクリーンを組み合わせるオフェンス戦術を構成するという概念を持ち込んだといえ、その後の日本では、オンボールスクリーンを組み合わせる構成するオフェンス戦術であるローリングオフェンスなどが採用された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 小谷 究
2. 発表標題 1930年代初期の日本におけるバスケットボールのゲームに関する史的研究：大学男子のゲームに着目して
3. 学会等名 日本運動・スポーツ科学学会第24回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小谷 究
2. 発表標題 A Study on the Process of Adoption of the Barry System in Basketball in Japan
3. 学会等名 Hawaii University International Conferences 9th Annual-Arts, Humanities, Social Sciences & Education (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考